



第8251号

2025年2月10日(月)

ウクライナ戦争、終わり方の難しさ

エコノミスト 西谷 公明

◆トランプ大統領の本音

世俗の独善王は、ノーベル平和賞がお好きらしい。

広く知られるように、4年ぶりに返り咲いた米国のトランプ大統領は、ロシアとウクライナの戦争を早期に終わらせると約束している。半年前には、1月の就任後、「24時間で」と大見えを切っていたのが、近ごろでは「半年か、それより早く」と後退したのだが。

ただし、トランプ氏の興味は戦争を終わらせること(=停戦)にあつて、ワシントンから大西洋を越えて遠く離れたウクライナの将来(=和平)にはないはずだ。

なにしろ同氏にとって、米国によるウクライナへの関与は、バイデン前大統領とその次男が深く関わった「バイデン父子マター」でもあるからだ。むしろ関わりたくもない、というのが本音ではないか。

◆停戦後に待ち構える選挙

トランプ氏はまた、ウクライナに対して選挙の実施を求めているらしい。

戒厳令下、ウクライナのゼレンスキー大統領の任期は延長され、最高会議の選挙も先送りされてきた。バイデン氏は、それを不問に付してきたが、ロシアは、そこを突いて揺さぶりをかけてもいる。

だが、いったん停戦となれば、戒厳令を解かないわけにはいかないだろう(現在の戒厳令は5月7日まで)。動員令も解除されて、早晩、大統領選挙が実施される運びとなるだろう。

この30年あまり、ウクライナ政治は少数のオリガルヒ(巨大財閥)に支配されて国民所得の向上には失敗したが、それでも選挙だけは普通に実施されてきた。選挙となれば、ゼレンスキー氏の進退も問われることとなる。

◆勝敗の帰趨は決している

2月24日に4年目を迎えるこの戦争がどのように終わるのか、そこは定かではない。そもそもウクライナにとって、銃もパンも支援頼みの戦争には、自ずと限界があったと言わざるを得ない。西側の支援はいつまでも続かない。「時間がロシアに味方する」と、これまで折に触れて幾度となく言われてきたのも、それ故だ。

ロシアのプーチン大統領は、トランプ大統領との頂上会談を歓迎する一方で、国家の野性をむき出しにして、東部ウクライナへの侵略の手を緩めようとはしない。

他方、停戦に向けた時間が経過するほど、ウクライナは戦場での劣勢だけでなく、財政的にもますます窮していくに違いない。戦争の帰趨(きすう)は、既に決していると言っても過言ではない。

もっとも、停戦後の国の安全が保障されないことを理由に、ゼレンスキー大統領と一部の愛国主義者たちがロシアへの抵抗をやめない、つまり戒厳令が解除されない可能性もあり得る。

ゼレンスキー氏は戦時のリーダーとして、ロシアへの抵抗を求心力としてウクライナ国民を一つにまとめてきた。この3年間、ロシアとの戦い自体がウクライナという国の存在理由と化した感すらあったと思う。

従って最後は、国土と国民の安全のみならず、ゼレンスキー大統領自身とその家族の安全をどう保障するかが、停戦に向けた鍵を握ろう。この戦争の終わり方の難しさの一面は、そこにあるのかもしれない。

(にしたに・ともあき)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003